



Title	北海道大学附属図書館報「榆蔭」
Citation	, 89, 1-32
Issue Date	1994-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/66449
Type	periodical
File Information	yuin89.pdf



[Instructions for use](#)



榎 蔭

Yuin 北海道大学附属図書館報

目 次

○遠い故郷の海へ 獣医学部教授 神谷正男…………… 1	○お知らせ……………20
○全学的情報システムに向けて 附属図書館 情報システム課図書館専門員 宇野弘純…………… 4	○ニュース……………25
○海外の図書館事情……………13	○特別寄稿……………26
○研修・講習会などから……………19	○本学教官著作物……………31
	○会 議……………32

遠い故郷の海へ

獣医学部教授 神 谷 正 男

……一時間幸せになりたいときにはお酒を飲みなさい、三日間幸せになりたければ結婚してみなさい、八日間幸せになりたければ豚を^{やっつけ}殺して食べる。……というのがあったが、私はお酒を戴くと、ものの30分もしないうちに幸せな気分になる。ときには眠り込み、遠い日の〈故郷の海の夢〉へ繋がることがある。1993年の大晦日は例によって宿題の原稿を少しでも仕上げたと、……本当はなにも終わってはいないのであるが……、深夜、中央郵便局の速達窓口へ駆け込み気休めの発送をする。正月は、少し畏まった気分でご馳走とお酒がはいる。それに25年前にバンコックでもとめた古いレコードで、3枚組のハイドンの〈四季〉を探しだす。合唱の部分で春の海か森の雰囲気^{やっつけ}の辺りまで進んだ頃、酔もほどほどになった。知人から贈られた本の表紙の不思議な風景が目にとまる。ひわ色の空と紅鬱金の空とが混ざりあって海に繋がるバリ島の風景である。開くと、こんな活字が飛び込んできた。〈……人間の体の奥には、遠い古生代の魚が一匹ひそかに棲んでいる……〉(三木成夫、海・呼吸・古代形象——生命記憶と回想、うぶすな書院)。これは形態学からはいっているが、連綿とつづく進化の流れのことが書かれているらしい。男と女の違い、人間とか動物の違いをはるかに越えて、あるものは故郷の海を捨てて陸へ、あるものは再び海へ戻っていった40億年の生物の夢の跡をいまの人間の体にもみているのである。その延長線上にはウイルスや細菌、寄生虫、植物さえも含まれよう。人間の体を例えば動物とか森とか海に、古生代の魚を例えば寄生虫とかモンゴルの齧歯類に置き換えると新しい発見がありそうな気がした。我々の教室の専門は寄生虫学であるが、この著

者と同じように時間的スケールも加味して、教室の創設以来、地球上のどこかに密かに隠れている寄生虫を探し回っている。寄生虫のことがわかれば宿主のこともよく判るからである。進化と云うおそれた命題でなくても、今日明日の問題であるエキノコックスのような寄生虫病の対策もたてられるからである。

最近、「動物系統分類学・爬虫類 II, 内田亨・山田真弓監修, 中山書店」が刊行された。20 回目の配本である。まだ完結していない。定価 ¥ 40,000 の高価な本である。第 1 回目の配本が昭和 37 年 (1962) で、¥ 4,000 であった。当時、生協のカレーライスが 33 円、いま大盛りで 300 円なので、物価の上昇を考えるとあまり変わってはいない。このような出版を支える人が少ないので仕方のないことなのであろう。

その巻頭言に本学理学部の内田亨教授は次のように書き出している。「……生物学者の間で、系統分類学は、だいたい完成された学問であるから、今後そう大きな変化はないと言われることがある。しかし自然科学の中に完成したという物が存在するであろうか。……自然科学は動いており、その分野は広がりつつ、他の分野と結びつき、研究方法は絶えず変化するので、時に全く新しい内容を持ち、目新しい様相を呈するようになることがある……」。この企画が始まってから 30 年以上もたっているが完結まであと数分冊を残している。本学の山田真弓名誉教授があとを引き継いだ。

戦前にも同様の企画があった。「系統動物学, 第 1 巻, 大島廣・岡田弥一郎編, 1943, 養賢堂」, 984 頁の大作である。その序に、「……今や長い間苦しみ抜いた仕事の一部がこの第 1 巻となって世に生まれ出づるをみて、私の胸には感慨の特に深きものあるを禁じ得ない……」とある。ところが、1 巻だけで終わっている。太平洋戦争へ突入して、この企画は中断したのであろう。

この時期、米国においても同様の企画があった。ハイマンの「THE INVERTEBRATES (無脊椎動物), L. H. Hyman, McGraw-Hill, N. Y., 1940」である。しかし、これも原生動物に始まって第 6 巻の軟体動物で終わっている。彼女は、その 40 年前に完結しなかったランカスターの「Treatise on Zoology」を引き継いで、大変な意気込みで望むが、1967 年、「……残念ながら、軟体動物 I をもって終わらざるをえません。78 歳という年齢でこれを完結するには集中力を欠くようになりました……」として、後続の研究者に期待してこれまでの訂正や追加意見を述べたあと、「……いま私はこの分野から引退しますが、満足しています。当初の目的である無脊椎動物の研究を鼓舞するという目的を達しましたので……」と結んでいる。学問の継承とはこういうことを言うのかもしれない。しかし、なんと手間ひまのかかる作業なのであろう。現在、研究の成果は質よりも量で評価され、ゴミのような情報が氾濫する時代にある。先人の<こころざし>は受け継がれてはいるが、少し心細くなっている。

自然科学は形の追求から始まったようであるが、最近の生命科学の還元主義的な傾向はますます進んでいる。自然の出来事を<統計作成室の計算問題>と考えられるようになってから久しい。ミトコンドリアの DNA 情報をブーツストラップ (靴のつまみ皮) とかいう方法で調理して別の面からすこし生物の歴史について語れるようになった。'60 年代に内田亨教授が予測した<目新しい様相>の時代とは、まさにいまの生物学の状況を言うのではないだろうか。少し生臭さはあっても<生物多様性>の重要さは認められつつあるし、この様な形を追求する科学が全体を統合する架け橋となる可能性は残っている。我が北海道大学には役所機能だけではなく当面の自然の問題を解決する風土に加えて、問題を発見する風土がまだ残っていて、それらを統合するパイオニアの系譜が生きつづけていると信じたい。

さて、正月のお祝い酒からいきなりこんな話になってしまったが、〈お酒は呑まない、結婚はしない、豚もやっつけない人〉はどうしたらいいのか？ 旅をおすすめしたい。旅をしているとお酒なしでも酔酩状態になれる。そのためには、頭よりも足、欲を言わせていただければ、〈考える足〉を鍛えたい。明日の今頃、私は南アメリカ大陸の端のほう、ウルグアイへ向けて飛行機の中で〈故郷の海の夢〉でも見ているであろう。かの国の寄生虫・エキノコックにミール・チケット (=meshi no tane) を求めて。
(獣医学部図書館委員)

附属図書館教養分館にブックディテクション・システムが導入されました

このたび、教養分館では北大で初めてのブックディテクション・システム（図書の無断帯出警告システム）を2階開架閲覧室に設置し、1月17日（月）から本稼働させています。現在のところ、利用者各位のご理解とご協力により混乱もなく順調に運用されています。

退室の際、貸出手続きを忘れて図書を持ち出そうとすると、警報ブザーが鳴り出口のバーがロックされますので、必ず貸出手続きを済ませてから退室されるようお願いします。

同システムの導入により利用者は、2階開架閲覧室内にも手荷物等を自由に持ち込めるようになりました。また、ビデオルームを4階から2階開架閲覧室内に移設しましたので、利用者は貸出手続きをする必要がなくなり自由に利用できるようになりました。

なお、誤作動でブザーが鳴ることもあり、そのような状況に対する対応には、細心の注意を払うよう心がけていますが、誤報のときは利用者の方々のご理解とご協力をお願いする次第です。
(教養分館情報サービス掛)

全学的情報システムに向けて

一次期図書館電算機システムの考えかた一

附属図書館情報システム課図書館専門員 宇野 弘 純

8年前、図書館にコンピューターが導入され、北大の蔵書を全学いたるところから簡単に検索できるようになりました。従来、手作業で目録を作成し、ファイリングし、電話で問い合わせしていたことに比べ、利用者サービスにとって画期的なことでしたが、同時に、我々図書館職員の図書館の捉え方についての大きな転換の契機でもありました。さらに、一昨年内ネットワークを利用したCD-ROMマルチ検索システムの導入によって、この転換はより一層明確に意識されるようになりました。コンピューターネットワークの世界の威力を知れば知るほど、テクノロジーの発達による学術情報流通の基本的変化に基づく情報環境の進展に対して、図書館の伝統的機能の充実だけでは対応しきれないのではないかと感じ始めています。

学術情報の増大は、これを収集し、蓄積し、管理し、読むよりも早く進んでいます。情報の電子化も進み、コンピューターでしか扱えない新たな形式の情報や、図書館を経由しない情報の流通経路も数多く出現しています。大学で必要とされる学術情報にかかわる機能は、図書館を「受入」れ、「整理」し、「閲覧」に供するという伝統的な概念を越えています。

大学図書館の将来像は「図書館の機能の充実」ということに留まらず、伝統的刊本図書館の経済性と技術革新がもたらす学術流通の基本的変化を前提とし、大学で必要とされる情報サービスにとって必要なものを作るという発想から検討すべきだと思います。

このような認識から、平成7年4月稼働開始を予定している次期図書館電算機システムは、大学におけるトータルな学術情報システムというものを強く意識して基本設計を行っています。

1. 大学で必要とされる情報サービス

かつて、「図書館にかよいつめる」ことが研究・学習に打ち込むことの象徴的表現の一つでしたが、今や研究に必要な情報は「図書館の資料」の枠を大きく超えています。大学で必要とされる情報は、その内容から、1) 研究教育活動に直接利用される情報(広義の「学術情報」)、2) 研究教育支援情報、3) キャンパス生活情報、に分けられるでしょう。情報サービスの形態からは、1) 収集・蓄積・利用提供、2) 外部情報システムとの連携、3) 計算処理、情報処理、4) 情報処理教育、情報基盤整備、情報処理支援、に分けられると思います。

一般に「学術情報」は、内容が学術的である情報(学術雑誌や学習図書などの狭義の「学術」情報)と、学術活動の素材となる情報(統計、データ、新聞、文書、写真などの「事実情報」と、これらを効率的に利用するための情報(目録や書誌などの「文献情報」)を含んでいます。むろん、データ集などは学術的素地の上に収集・編集されますし、「目録」の中にも北方資料目録のように学術的成果と評価されるものもあります。しかし、従来「学術情報流通システム」として実現されているものはむしろ「文献情報システム」でした。

とりあえず、次期図書館電算機システム(以下、次期システムという)では、「学術情報」と「研究支援情報」を効果的に「収集・蓄積・利用提供」し、「外部情報システムとの連携」ととれるようなものとし、学生の主として学術情報に係わる「情報処理教育」にも役立つこと

を目標にしています。

2. 図書館の情報ネットワークサービス

1) 蔵書情報の提供

本学には約 300 万冊の蔵書があります。図書・雑誌などの「冊子体」はコンパクトでパラパラ通覧できますし、物理的に固定化され、形象化された記録情報として情報の「権威」を示すこともできます。情報媒体の電子化がさんになっても当分の間、「本」は出版の主流であり続けるでしょう。

これらの北大が所蔵する学術資料の所在情報を迅速に提供することがまず第一に必要です。次期システムのオンライン目録 (OPAC) は、より簡単な操作でどこからでも検索できるようにしたいと思います。閲覧室の蔵書検索端末 (OPAC 端末) では、ローマ字かな変換、漢字入力、文字表、分類記号の一覧なども利用できるようになります。

また、「論理演算」や「前方一致」という手法を使ってコンピューターならではの探し方ができます。たとえば「(山田か山崎) 某の書いた (日本の経済…) か (現代日本の経済…) とかいう本」を探するとき、カード目録では著者名順目録の (山田) と (山崎) の何枚ものカードを 1 枚ずつ調べる必要がありました。次期システムでは「{(ヤマダ %) または (ヤマザキ %)} か? {(ニホン %) または (ゲンダイ %)}」という論理式で瞬時に結果が出てきます。(% 記号は、それ以降の文字が不明であることを意味します)

2) 雑誌目次情報の提供

北大が所蔵する図書・雑誌などの書誌所在情報を即時に検索できるようになったのは電算化以前の状況に比べると大きな進歩でしたが、雑誌は書誌情報 (誌名) だけでは文献情報として不十分です。論文名、執筆者名も必要です。しかし個々の大学がこの種のデータを独自で作成するのは困難ですし効率的でもありません。アメリカではすでに図書館職員の共同作業による雑誌目次の膨大なデータベースが作られておりどこからでも無料で検索できます。たとえばコロラド研究図書館連合の雑誌目次のデータベース (Uncover) は 12,000 誌の目次情報が日々 4,000 件近く累積され続けています。

日本でも学術情報センターが中心となって全国の大学図書館の協力によって目次情報データベースを構築する事業が進められています。当面は大学の紀要と学協会雑誌が対象となります。紀要については当該大学の図書館が作成します。学協会誌については既に学協会の協力を得て作成が進んでいるのもありますが、図書館もいくつかの学協会誌を分担してデータを作成することになります。

次期システムではこれにいち早く対応して、新着雑誌が届いた段階でデータを作成し即時に学術情報センターへ送信する機能も加える予定です。このデータベースは NACSIS-IR に登録され海外にも提供されます。任意入力項目ですが、欧文タイトルや抄録の項目もありますので、紀要類に著者によるこれらの項目が付されていることが望ましいと思います。

3) A&I (抄録・索引) 情報の提供

北大では学内 LAN (HINES) の敷設を契機に、MEDLINE, BIOSIS, Current Contents (Life Science) の論文抄録データベース (A&I) を無料で 24 時間いつでも検索できるサービスを開始しました。アメリカで大学図書館が A&I サービスに取り組んだのは 1980 年代後半ですが、日本の大学図書館で大規模 LAN でのサービスを実施したのは北大が最初だと思います。100 ユーザーで週平均 3,900 回とかなり利用されています。それでも全構成員をもとに計算す

ると一人当たり週約 0.1 回であり、カリフォルニア大学の 25 万人の全教官・学生が一人当たり週 2 回利用しているのと比べるとかなりの差があります。これだけの開きが出るのは提供データベースの数と利用環境に大きな差があるためです。

いかにアメリカの大学図書館でも全分野にわたって主要な商業データベースの無料検索を図書館独自の予算で維持することはできません。高額なデータベースのライセンス契約および提供・利用設備のための費用は全学的措置でなされています。とりわけネットワークで提供するデータベースの価格は急激に上がっています。従来の「図書館の資料費」という概念ではとても対応できないと思います。

利用環境も数段すぐれています。図書館にもかなりの利用者用端末を用意するとともに、図書館のどんな端末からでも利用できるような検索システムにしています。

現在の北大の A&I マルチ検索システムでは、利用者が特定の端末機器を備える必要があります。これを UNIX によるシステム構成に変更すれば、どんな端末からでもどこからでも、また HINES に負荷をかけずより高速で使いやすい検索サービスを提供できるようになります。この方式の導入については新たな投資が必要となりますが、ぜひ実現したいと思います。

4) 外部データベースへのアクセス

大学独自で作成するデータベース、学内システムに取り込む外部データベースの他に、大学の外には膨大なデータベースがあります。これらのほとんどはコンピューターネットワークを介してキャンパス内から利用できます。これらの外部データベースを効率良く使う仕掛けとして「Gopher」というソフトがあります。砂漠の地ネズミ (Gopher) がネットワーク上 (例えば Internet) を走り回って世界中のデータベースホストへの案内をしてくれます。

世界中のデータベースホストには有料なものもありますが無料で利用できるものも多くあります。しかし便利で無料と言っても「使い得」ではなく「お互い様」と考えて、われわれの側からもデータを提供できるようにするべきだと思います。次期システムではこの Gopher サーバーを備えて北大の情報も提供し、外部データベースへの効率的アクセス、世界的規模でのライブラリアンの共同作業の成果へのご案内もしたいと思います。

5) 全文データベース

利用者が最終的に必要なのは資料そのもの、あるいはそのフルテキストデータです。原典そのものでなければならぬこともありますが、コピーやデジタル化 (電子的手法で取り扱えるように、0 と 1 の情報に変換) したものの復元で良い場合も多いと思います。デジタル化した情報はコンピューターネットワークで入手できるという利点がありますし、ほぼ永久的に原型のとおり復元可能ですし、圧縮、変換、加工が自由です。

次期システムにおいては、新着雑誌の目次や本文をスキャナーで入力しビットマップで表示する仕掛けを用意するつもりです。しかし、実際に運用するためには、入力機器、記録媒体、入力業務量、著作権等の問題があり、本格的全文データベースのサービス提供は先のことになると思います。

別のシステムになりますが、近い将来図書館が提供を予定している全文データベースサービスとしては「北方関係総合情報データベース」計画があります。

6) 北方資料データベース: マルチメディアと知識の変容

マルチメディアと言うとアカデミックな大学とは疎遠なパソコンの面白情報の感じがないでもありませんが、マルチメディアの本質は、様々な媒体の情報を電子的手法で一元的にかつ統合的に利用するという点にあります。「様々な媒体」という点では図書館は「本」のほか

にフィルム、音楽レコード、写真、CD-ROMなど、すでに「マルチメディア」を所蔵しています。しかしこれらは、それぞれ別個の方法で利用されている場合が多いのが現状です。

一元的、統合的利用とは、様々な媒体の情報をデジタル情報に一元化し、再び全ての情報を統合して総体として享受するということです。

現在図書館では「北方関係総合情報データベース」計画を「概算要求」に計上しています。これは附属図書館北方資料室の様々な媒体の情報を統合的に利用できるようにしようという計画です。たとえば利用者が「(小樽), (大正), (商業)」と入力すれば、当時の市街図、写真、統計、旅行記、音楽レコード、小説、研究報告などのすべての該当資料をリストアップしてくれて、高解像度のマルチウインドウ画面に地図や写真や資料を同時に表示させてそれぞれを自由に一覧したり拡大したり、場合によっては同時に当時のレコードなどを聴いたりできるようなシステムです。

「北方関係データベース」の意義は、まず、様々な媒体に分割されてしまった知識をデジタル処理を経て総合的な知識として編成するという意味があります。これによって研究作業の効率化に役立ち、新たな研究上のヒントが生まれることが考えられます。ワープロが編集機能の便利さから「思考の道具」と言われることに例えれば、マルチウインドウ・グラフィック機能でマルチメディアを複眼的に駆使できるこの計画が実現すれば高機能ワークステーションが新しい「発想への触媒装置」と称されるようになると思います。

次に、このシステムは新しい知識の形式を例示するものとなります。画像情報は平面的な静止画(絵・写真)から平面的な動画(映画・テレビ)さらに立体的な動画(コンピューターグラフィック)へと情報の様態が進化しました。カリフォルニア大学の医学図書館では人体の診断や仮想解剖もできる3次元データベースを作成しています。これは言わば現代の「解体新書」でありひとつの新しい知識の形式です。この北方関係総合情報データベースが完成すれば、近年、要素還元的・分析的な研究方法に加え、関係把握、総合化の方法も多く採られるようになった人文社会科学の分野における知識の変容を象徴するものとなると思います。

このシステムはまた、いわゆるエキスパートシステムとしてうってつけのものです。たとえば「大正時代の小樽の商業の様子を知りたい」と言う質問には、様々な媒体の資料を熟知した人(エキスパート)しか対応できません。これらの資料を熟知するには10年を単位とした研鑽が必要です。しかしこのシステム、すべての情報をコンピューターに入れて自由な発想で取り出せるシステムに向かえば、何十年という資料研究に匹敵する成果を即座に手にすることができます。

さらに「北方関係資料」ということでは、北大ならではの特色あるコレクションのデータベースを学内・国内はもとより海外にも提供し、北大の国際的貢献にも役立つという意味もあります。

現在図書館では、科学研究費の助成を受けて文字データを作成し、パソコンによるプロトタイプを作成済みです。この計画を達成するにはサーバー機に高性能のワークステーションを備えるなど5000万円を超える費用が必要となり、図書館独自の予算では困難ですが、是非実現したいと思います。

7) 学内情報

大学で必要とされる情報は、学術情報に限られません。研究活動情報(たとえば研究協力課の「研究課題データベース」)、研究活動支援、教務情報(たとえば教務事務電算化による公開情報)や、キャンパス生活情報(たとえばUCOOPデータ)、事務情報もあります。事務情報はデ

ータ内容の性質上、閉じた仮想ネットワークで運用されますが、それ以外の情報は構成員の必要に応じて適宜利用できると便利です。電子的情報処理のレベルでのオープン化、利用協定などの問題もありますが、「学内情報のオープン利用」を具体的にイメージするための「総合情報ターミナル(仮称)」の最初の画面を例示したいと思います。(文末図参照)

3. 目録作業：検索語

北大が受け入れた図書・雑誌の書誌・所在データの作成は、学術情報センターの全国図書共同目録への登録作業と一体化して行われます。このことは現在でも同じですが、次期システムでは北大蔵書データベースは現在の1日遅れではなく、即時更新される予定です。北大では学内外の協力を得て週及入力が進み、全体の60%以上の蔵書をオンラインで検索できます。週及入力は思わぬ資料の掘り起こしという効果もありますが、入力数が増えるにつれて未入力のカード目録の方は探さなくなるという傾向が特に学生には生じて来ます。なるべく早い時期に全ての蔵書をオンラインで検索できるようにするため、より一層の努力をしたいと思います。

北大蔵書データベースの検索キー(検索語、コード)は出来れば次のようにしたいと思います。

- 1) 漢字形でも検索できること。(読み方が多様の書名でも検索できる)
- 2) 長音、促音、表音記号を意識しなくとも検索できること。
(「データー」、「データー」、「データ」が同じ扱いになるなど、検索語の受け付けが弾力的になります。)
- 3) ストップワード(検索語不採用)をなるべく少なくして、書名中の語句であれば何でも検索できること。(「報告」や「Symposium」なども検索できる)
- 4) 件名からも検索できること。
(ただし、学術情報センターのデータに件名が付与されていないものがありますので網羅的な検索にならないこともあります。)

これらの「新機能」は次期システム導入後に作成したデータだけではなく、今までのデータの全てに適用出来て初めて意味があります。そのためにはデータベースの再構築が必須となりますが、現在の60万件に及ぶ書誌データの膨大な検索語の変更処理には「検索語自動切り出しソフト」が必要になります。このソフトは高額ですが、導入後の検索語付与の標準化、目録作業の効率化にも役立つので是非備えたいと思います。

現行のCLARK検索は「確定した書誌事項から所在情報を検索する」ということを第一の目的にしています。分類記号を検索語とすることによって「主題から書誌・所在情報を検索する」ことも出来ますが、主題からの検索をより効果的に行うためには件名でも検索できることが望ましいと思います。しかし件名を付与する作業を新たに行うのは非常に困難です。そこで、国会図書館やアメリカ議会図書館が付与し学術情報センター目録ファイルに転記されている件名をそのまま利用することが考えられます。

次期システムでは学術情報センターの目録ファイルに基礎データとして入力されている書誌についてだけは件名からも検索できるようにするつもりです。

4. システムの機器環境

次期システムはいわゆる高機能ワークステーション(WS)で構成する予定です。附属図書館のWS(データベース・通信サーバー等のセンターシステム)と各部局図書室のWSがHINES

で接続され、各図書室の WS を共有する形で図書業務用端末と利用者検索用端末が提供されます。システム外からの図書館側に備える予定の検索サーバ、Gopher サーバなどへのアクセスは HINES を利用することになります。今のところ、150 万件に及ぶデータベースを WS で処理しているシステムの例はないと思います。端末の数は未定ですが、安定稼働の確認後になんらかの形で各図書室に WS が追加されることも有りえますし、システム外からの利用（情報検索）も格段に増加すると思いますので、まず、たくましいセンターシステムを構築する必要があると思います。

5. 情報検索機器

次期システムでは情報提供モードを次の 3 つに分けて行うことを考えています。

1) 蔵書検索専用システム

来館者・来室者がもっともよく利用する蔵書検索を随時利用できるようにする。

2) 総合情報ターミナルシステム

蔵書検索、利用案内、北大各種データベースの検索、キャンパス情報、学内情報系機関へのアクセス。図書館・室で総合的な情報サービスをじっくり利用できる。

3) 図書館情報サービスシステム

一般的なパソコンで研究室や自宅からも上記 2) の多様な情報サービスや図書館へのメール、リモート発注依頼、自己予算執行状況検索を利用できる。

- 1) については、次期システムのレンタル機器対象として図書館・室に備え付ける予定です。
- 2) については、主として図書館・図書室等が次期システムの情報サービスに対応して WS 等を別個に備えて利用提供する場合を想定しています。なお、この場合、ホスト側の負荷等の関係で「接続申請」を経てからということになると思います。
- 3) については、研究室や自宅からもパソコン、通信機能付きのワープロで自由に情報サービスを利用していただく場合を想定しています。

6. 利用環境

検索はできればほぼ 24 時間提供して、研究室や自宅からでも、時差のある海外からも随時情報サービスを利用できるようにしたいと思います。しかし学生のほとんどは図書館・図書室の端末を利用しなければなりません。現在、利用者用専用端末は全学でほぼ 30 台ありますが、蔵書検索サービスだけに使われている現在でもデータの増加に伴い端末数が不足気味です。

情報サービスの種類が増える次期システムにおいて利用者端末は、図書館システム専用端末というよりも全学情報ターミナルという性格になると思います。学内情報システムの一環としての次期システムの成否は、どれだけの数の利用者用端末を北大構成員に提供できるかにもかかっていると思います。

WS には GUI (Graphical User Interface) 操作という特徴があります。マウス (ねずみ型の付属機器) をすべらせて画面の中の矢印 (カーソル) を処理内容の表示部分に重ねてからマウスのボタンを押して処理を実行させます。この方式は分かり易く便利なこともありますが、キーボードの操作に慣れた人にとっては煩わしくもあります。これに対して、現行システムの CUI (Character User Interface) 操作では、すべての作業をキーボードだけで行えます。キーボードも画面も見ないで、資料だけを見ながら目録作業を進めることも可能です。つまり一概に「GUI だから便利」とは言えません。

次期システムでは、蔵書検索専用画面ではマウス操作だけでもキーボード操作だけでも使えるようにし、文字入力が多い図書業務処理部分ではキーボード操作を中心にしたしたいと思います。

7. 文献要求と配送(ドキュメントデリバリ)

先に雑誌目次データベースの例として挙げた Uncover では、複写物の請求をクレジットカード番号で受付けて、FAX で配送するサービスを行っています。

次期システムでは、研究室から複写物の申し込みが出来る仕掛けも備える予定ですが、実際の運用では料金の決済手続きと資料配送の人手が問題となります。幸い北大には「学内便」という物流システムも確立されています。HINES のイメージデータ送受信システムもあります。残るは課題は「決済処理」です。

国の機関である以上一定の制約があるのは当然ですが、国立大学の研究者でも必要な文献をできるだけ早く入手したいという思いは同じです。せめて大学内だけでも、たとえば部局間で前年実績に基づいた総額で決済するなどして文献配送の迅速化と事務の簡素化が図れないものでしょうか。ちなみに、ここ数年「決済」方法の改善とオンライン処理の導入がなされた結果、北大から国立大学への文献複写依頼は増え、従来通りの決済方法である北大から海外機関への依頼は減少しています。

8. 図書業務体制の見直し

全国図書共同目録システムの成功によって、個々の大学図書館は精度の高い目録データを極めて効率的に蓄積できるようになりました。しかし依然として学内 20 カ所近くで多くは他の業務と兼務しながら個々に目録業務を行ってなっています。目録作業は全学の 1, 2 カ所で集中して行うことにすれば、入力データの標準化と業務の合理化を図ることができます。分類記号の付与作業も、各部局の担当者が苦勞するよりも学術情報センターファイルに付与されている記号を利用すれば効率的に行えます。

一方、データベースの充実の結果、文献の利用要求が増加し続けていますがその担当要員は増えていません。また、コンピューターネットワークの時代を迎えてシステム対応業務も増えて来ます。図書業務体制を全学的に検討すべき時期だと思います。

業務体制の再編成と共に、業務そのものの見直しも考えられます。次期システムでは新たに図書の会計管理業務のサブシステムも追加する予定です。発注時の重複調査や書誌データの入力を簡単にできるようになりますし、研究室から電子メール方式での発注依頼や発注者の予算残高確認も出来る仕掛けも付ける予定です。また、すでに完成している全学予算執行システムへのデータ入力に際してこれに対応した形式でのリストを出力し、正確・迅速に処理できるようにもなります。しかし図書室の会計処理の中で大きなウェイトを占めるのは、図書室で扱う予算の執行済状況を適宜に把握することまつわる仕事です。ところがこの扱い方が各部局図書室で(教官等の要求により)まちまちです。かと言ってここに多くのコンピューター資源を投入しても全体の効果はそれほど向上しません。

現在の業務体制を前提とした自動化に腐心するよりも、情報サービスに資源を投入するという方向で業務を見直すことが必要になってきていると思います。

9. 教育支援環境

ある大規模国立大学の図書館に「大型計算機センター」や「情報処理教育センター」の端末が置かれているのを見たことがあります。ラウンジ部分に数台のワークステーションやプリンター、連絡用の電話が置かれ、学生が計算課題のために自由に使っていました。また別の私立大学の図書館では1階のかんりの部分を「メディアルーム」としてCDやビデオなどとともにネットワーク環境で情報関連機器を自由に使えるようにしていました。サンフランシスコのヘイズディング法律校はそう大きくありませんが図書館の閲覧室に隣接したグループ学習室では判例データベース利用の演習が行われていました。次期システムはこのような光景がわが北大でもそう遠くない時期に見られることを期待をこめて想定しています。

大学には人の集まる場が必要です。ネットワーク上でのコミュニケーションがいかに発達しても、社会的雰囲気欠ける仮想社会では生身の人間の交わりは経験できません。人間の生物学的研究の「科学」上の成果が直線的に高度先端「技術」に転化し、医療という「人間的行為」に直結してやがて倫理の問題が起きたことが象徴しているように、高度情報化時代の社会人となる学生は情報処理技術と共に人間性豊かな素養を身につけることも求められていると思います。図書館にはこれに応える万巻の書も備えられています。情報リテラシーの教育という点に限っても、図書館はあらゆるメディアの情報にアクセスでき、学術情報の利用方法を習得する格好の場でもあります。ここに新しい様式の知識の世界が加わることによって、「グーテンベルグ革命（活版印刷）」から「コンピューター革命」を包括した21世紀のアカデミアが生まれると思います。

10. 全学情報システム

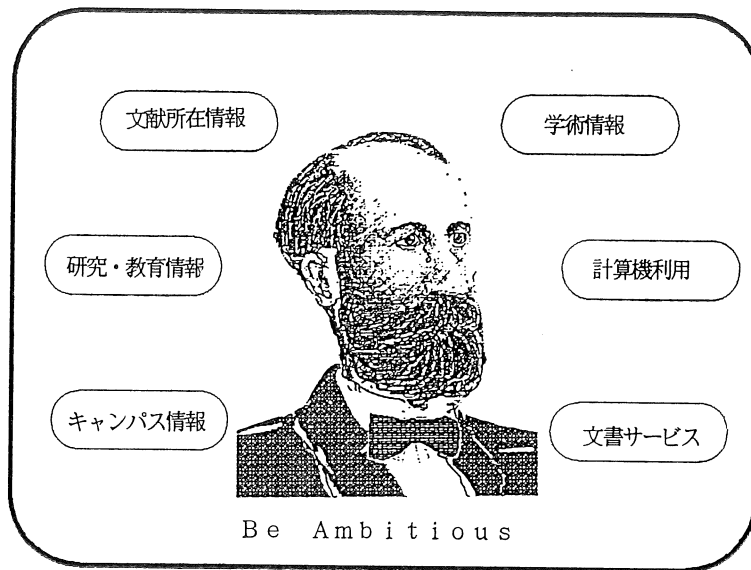
コンピューターがその高速計算機能に焦点が当てられていた時代はコンピューターの利用は自然科学系分野に留まっていた。しかしデータ処理能力に威力を発揮しはじめた現在、人文社会科学分野にとっても重要です。特定の語句などを瞬間に検索できるCD-ROM版個人全集など情報のデジタル化も進んでいます。膨大な刊本形態の資料を有効に利用するためにも電子的処方が必要です。

HINESの完成を機に北大でも「エレクトロニックキャンパス」が現実のものとなって来ました。デジタル情報は電子機器によって処理され、これを利用するには機器の操作が必要です。高度情報化へ対応するには高額な機器と高度の情報処理能力が求められます。全学的な経費の有効活用とシステム支援体制が是非とも必要です。

北大でも大学で必要とされる情報の全体像の把握、情報サービスの内容、機器の整備、情報処理支援体制の強化など、個々の組織が個別の将来像を求めるのではなく、大学全体としての対応がなされるようになると思います。アメリカでは既にこのような観点から学内の情報系機関の再編成・機能の融合がなされている大学が少なくありません。日本のいくつかの大きな公立・私立大学でも行われています。しかし、国立大学では小規模な単科大学の中に、学内LANの導入時に図書館も一体となって全学体制をとるという例が見られるだけです。

次期図書館電算機システムは、北大にもやがて全学情報システムという考えが生起されることを想定し、図書館もその重要な構成要素となることを志しています。

北大総合情報ターミナル (概念図)



上記第1画面に6つの情報サービスブロックが案内され、いずれか一つをマウスで指示して選択すると以下のような情報サービスメニューが展開されます。項目番号を指定するとそれぞれの情報サービスを利用できます。操作はCUI、表示データは文字情報です。(図書館以外の各システムをこのターミナルからアクセスできるよう、今後各機関の了解を得たいと思います。)

〔文献所在情報〕

1. 北大蔵書検索 (図書館)
2. 国内所蔵検索 (各図書館等)
3. 海外所蔵検索 (各図書館等)

〔研究・教育情報〕

1. 北大研究課題データベース (事務局)
2. 科学研究費等情報
3. 学会, 研究会情報
4. カリキュラム情報 (教務事務センター)
5. 課題, レポート提出

〔キャンパス情報〕

1. 学内広報
2. 生活情報
3. 新刊情報

〔学術情報〕

1. Current Contents (図書館)
2. Medline (図書館)
3. BIOSIS (図書館)
4. 北方データベース (図書館)
5. 北大構築データベース
6. 外部データベース (国内)

〔計算機利用〕

1. 大型計算機センター
2. 情報処理教育センター

〔文書サービス〕

1. HINES
2. 国内, 海外ネットワーク
3. 自動翻訳 (図書館)

◆ 海外の図書館事情

韓国, シンガポール, マレーシアの図書館を見学して

附属図書館情報システム課目録情報掛長 山口 國 雄

昨年10月末から2週間の日程で北大国際交流事業基金により、韓国、シンガポール、マレーシアの大学図書館、国立図書館を見学する機会を与えられた。初めての海外旅行で緊張に満ちた旅立ちとなったが、訪問先の各図書館で温かいもてなしをうけ、また、いろいろな方と会うことができ実り多い旅となった。

訪問した図書館は次の5図書館である。

1. ソウル大学図書館 (韓国)
2. 国立中央図書館 (韓国)
3. シンガポール国立大学図書館 (シンガポール)
4. シンガポール国立図書館 (シンガポール)
5. マラヤ大学図書館 (マレーシア)

欧米の図書館に比べるとアジア諸国の図書館事情については、これまで紹介される機会も少なかったので、ここでは簡単な沿革も含めて以下に印象をまとめてみたい。

1. ソウル大学図書館 (Seoul National University Library)

ソウル大学は旧京城帝国大学とソウル市内にあった9つの学校を合併して1946年に創立された韓国最初の国立大学である。1968年、医学部、農学部等を除く大部分の学部、研究所が市中心部から現在地の冠岳キャンパスに移転した。大学図書館は中央図書館、農学図書館、医学図書館、法学図書館からなり、蔵書数は160万冊。中央図書館は4.3 km²あるという広大な冠岳キャンパスのほぼ中央に位置し、6階建、30,505 m²のフロアスペースに4,000の閲覧席をもつ韓国最大の大学図書館である。

図書館長の朴孝根先生は持参した北大図書館概要や北大図書館電算システム構成図を熱心



に見てくださり、とりわけ当館が昨年からサービスを開始した CCoD マルチ検索システムに関心を示しておられた。先生ご自身 CCoD: Agriculture, Biology & Environmental Sciences を利用されているとのことである。

韓国における大学図書館の電算化に関しては、韓国国公立大学図書館長協議会が1991年に「大学図書館学術情報電算網構築計画書」を発刊し、大学図書館学術情報資料の共有体制の構築を提案している。この構想によると、ソウル大学図書館が大学図書館学術電算網の中央センターとなり、全国に9つの地域センターを設置して、この地域センターを中心にして大学図書館学術情報電算網を構築するという計画である。この計画の進捗状況等を聞きたいと期待していたのであるが、私が訪問した時はあいにく電算担当者が全員打ち合わせ中とのことで具体的な話を聞くことができなかった。ソウル大学図書館の電算化については、洋書目録がOPACで提供されていることなど部分的には稼働しているが全体としてはこれからのようである。

この図書館では一般参考図書を配架してある参考閲覧室とは別に情報管理室が設けられている。情報管理室は文献検索を専門に行うところで、索引・抄録誌が置かれているが、各種CD-ROMの導入により最近では専らCD-ROMが使われているとのことだった。実際私が見学している間その部屋に設置されている5台のCD-ROM用端末は全部利用されていた。また、UnCoverも利用しており、文献の検索はもとより文献コピーの迅速な入手に努めているとのことだった。

6階には旧京城帝国大学時代の蔵書が整然と保管されており、今も利用されているとのことである。館内はどの閲覧室も利用者で一杯だった。

2. 韓国国立中央図書館 (National Central Library)

国立中央図書館は1923年に設置された旧朝鮮総督府図書館を第2次大戦後引き継ぎ、1945年国立図書館となり、開館された。1963年韓国図書館法の制定とともに国立中央図書館と改称し、その後1988年現在地に新築、オープンした。

組織・機構は、館長の下に2部、7課、1室、1分館で構成され、職員数236名、蔵書は200万冊である。まだ真新しい感じのする建物は、地下に書庫をもち、1階はレファレンスルーム、貸出カウンター、そしてカード目録と蔵書検索用端末がずらりと並んでいる。2階は閲覧室、3~4階は開架閲覧室と雑誌・新聞、5階は学位論文、視聴覚室、6階は事務スペース、7階は個人文庫、系譜資料室、貴重室となっている。5階の視聴覚室にはビデオ、CDなど各種メディア機器が設置されており、私が見学したとき映画が上映されていて大勢の人が見入っていた。ソウル大学図書館もこの図書館もビデオ、CD等の視聴覚資料はかなり充実しておりよく利用されているようだ。7階の個人文庫は、学者・篤志家から寄贈された蔵書を旧蔵者毎に分けて保管・展示しているコーナーで、旧蔵者の肖像写真と経歴が入り口に掲げられている。このコーナーと隣接する系譜資料室では族譜を集中管理している。国立中央図書館は国内族譜の最大の所蔵館であり、地域と名前を言えば即座に関係資料を提供できるよう整理されているとのことである。

国立中央図書館では1976年から図書館電算システムの開発に着手し、既に収書、目録、蔵書検索、雑誌管理、貸出管理等全業務を行う館内トータルシステム“CENTLAS”を稼働させており、1982年以降受入れの資料約50万冊がデータベース化され、OPACで提供されている。1992年からはDACOM, HITELのネットサービスを通して自宅やオフィスからでも蔵書検索ができるようになった。

一方、1992年より5カ年計画で「図書館情報電算網」(KOLIS-NET: Korean Library Inf

ormation System Network) 計画が推進されている。この計画は、韓国政府が進める「国家基幹電算網基本計画」下の「教育研究電算網」の中の1つで、国立中央図書館を中心として文献情報処理の標準化と図書館業務の電算化を行い、これをもとにして全国の図書館をネットワークで結ぶ計画である。この構想では、国立中央図書館の下に19の地域センターを置き、さらにその下に全国の350図書館が結ばれてネットワークを形成することになる。現在既に4地区センターが接続しているとのことである。

3. シンガポール国立大学図書館 (National University of Singapore Library)

シンガポール国立大学は1980年シンガポール大学 (University of Singapore) と南洋大学 (Nanyang University) とが合併して創立された。シンガポール大学の起源は2つの高等教育機関、1905年創立の医学専門学校 (のちにエドワード7世医学専門学校 (King Edward VII College of Medicine) と改称) と1929年に開校したラッフルズ学院 (Raffles College) に遡る。第2次大戦後マラヤ連邦が成立し、1949年この両学校を合併してマラヤ大学が創設されたが、1959年シンガポール校とクアラルンプール校に分かれ、1962年シンガポールのマレーシアからの分離独立に伴いシンガポール大学となった。一方中国系の子弟を教育する大学として、1953年南洋大学が発足した。その後さまざまな曲折ののちシンガポール大学と南洋大学が合併することになり、1980年両大学は合併してシンガポール国立大学となった。

大学図書館は中央図書館、医学図書館、法学図書館、自然科学図書館、中文図書館、Hon Sui Sen 記念図書館の6図書館で構成されており、蔵書数は180万冊である。図書館長の Jill Quah 氏は何度か来日されたことがあるとのことで、「日本は大好きな国です」とおっしゃってくださった。日本や韓国では大学図書館長は教官になるのが一般的だが、シンガポール、マレーシアでは図書館専門職の方が館長になれる。

図書館入口を入ると左手にインフォメーション・デスク、右手に貸出カウンターがある。インフォメーション・デスクを通り過ぎるとレファレンス・ルームになっている。ここには一般参考図書他に地域資料としてシンガポール・マレーシアコレクションがある。このコレクションは、シンガポール、マレーシア、ブルネイおよび ASEAN 諸国に関する資料を網羅的に収集しているもので、現在約5万冊とのこと。図書ばかりでなく同地域に関する新聞記事の切り抜き、パンフレット類の収集も行っている。また、情報検索サービスとしては、PERIND (自館で作成しているシンガポール、マレーシア、ブルネイおよび ASEAN 諸国関係の雑誌記事データベース) サーチサービス、DIALOG 等の海外データベース検索を行う LOIS (Library Online Information Search) サービス、全部で70タイトルあるという CD-ROM による情報検索サービス (このうちの数タイトルはキャンパスネットワーク NUSNET を通して研究室からもアクセスできるとのこと) を行っている。

貸出部門のスタッフは28人 (専門職2, 事務職員6, その他20人) おり、開館時間 8:00-22:00 (月～土曜日), 9:30-16:30 (日曜日) にあわせて1日4交代制をとっている。「職員数が多くて羨ましい」と言うと、そちらはどのようにしているか尋ねられたので、夜間開館については職員が交替で行っていること、超過勤務手当が支給されることを説明すると「超勤手当をもらえる方が羨ましい」と言い返された。相互貸借については、マレーシアへの貸出が多いこと、借りるときはオーストラリアから借りる場合が多いとのことである。

電算化に関しては、図書館システムが完成、稼働している。蔵書検索システム LINC (Library Integrated Catalogue) 端末は利用者用として中央図書館だけでも各階に合計25台設置されており、また、キャンパスネットワーク NUSNET を通して学内のどこからでも検索

できるようになっている。この検索システムでは、発注中、整理中の図書も検索することができる。また、検索した図書が貸出中とか、禁帯出図書とかも表示され、貸出中の図書に対しては利用者端末から予約することができるし、貸出期限の更新もできるようになっている。目録システムとしては、後述する SILAS に加入しており、SILAS から書誌データを取り込んで目録データベースを形成している。

6階にある日本語資料部 (Japanese Resources Department) は、1981年に人文社会学部に日本研究科が設立されたとき設置された。現在、スタッフ5名(兼任、パートを含む)、蔵書数約25,000冊、雑誌170種、日本語新聞2種を受入れている。目録は現在のところカード目録を作成しているが、1994年より中国語、日本語資料の機械入力を行う計画で準備を進めているとのこと。設立以来、国際交流基金 (Japan Foundation) の援助で資料を充実させてきたが、日本語図書は高いので予算的には苦しいと部門主任は話していた。

3階の一角にパソコンが30台程並んだ Computer-based Learning Room がある。ここにあるパソコンは大学の計算機センターが提供しているもので、図書館は場所を提供しているだけのことだが、学生はここで自由にネットワークアクセスやアプリケーションソフトを利用できる。今は休みに入っていて図書館の利用者は普段より少ないとの説明であったが、この部屋のパソコンはすべて学生によって埋めつくされていた。

4. シンガポール国立図書館 (National Library)

シンガポール国立図書館の歴史は、1823年ラッフルズが設立したシンガポール研究所 (Singapore Institution) に附設された図書館にはじまる。その後1844年にシンガポール図書館となり、第2次大戦中の日本占領時代には閉鎖されたが、戦後の1957年ラッフルズ国立図書館法が成立、1958年国立図書館となり、活動を開始した。この図書館の特徴は国立図書館と公共図書館の機能をあわせもつ点にあるという。現在、中央館と8つの分館からなり、職員数402名、蔵書数300万冊、言語別にみると英語62%、中国語24%、マレー語10%、タミール語3%の割合となる。

国立図書館の電算システムは NALINET (National Library Network) と呼ばれ、8つの分館すべてを結んでいるトータルシステムである。また、私が訪ねた日の丁度1週間前から運用を開始したという NLine (National Library Line) サービスがある。これは自宅やオフィスからパソコンを使って国立図書館の蔵書検索や貸出中の図書の予約、図書館案内を見ることができるシステムである。現在、開発・導入を計画しているコンピュータ・サービスとして、中国語資料の機械入力、貸出・返却手の自動化 (セルフサービス)、全自動出納書庫の導入、Fulltext サービス等を検討しており、実現していきたいとのことである。

国立図書館の機能として、全国書誌 Singapore National Bibliography (SNB)、雑誌記事索引 Singapore Periodicals Index (SPI) 等を発行しているが、同時に書誌ユーティリティ機能をもつ SILAS (Singapore Integrated Library Automation Service) の維持・管理に中心的役割を果たしている。SILAS は書誌情報に関してわが国の NACSIS と同様、US, UK, ANB, その他の MARC をもち、共同分担目録により総合目録データベースを形成している。現在、国立図書館、シンガポール国立大学図書館等45館が参加しており、図書165万冊、非図書資料 (MF, 視聴覚資料等) 10万点が登録されている。

5. マラヤ大学図書館 (University of Malaya Library)

マラヤ大学はシンガポールに1949年に設置された大学のクアラルンプル分校として1959年に設置され、1962年に至ってシンガポール大学と分離独立した。

大学図書館は、本館と法学図書館、医学図書館等の10分館からなり、職員数280名、蔵書数110万冊である。1982年より図書業務の電算化を推進してきた。現在の蔵書検索システムは1992年から運用を開始しており、英語、マレー語、アラビア語、タミール語資料が入力されている。全蔵書110万冊の70%が既に入力され、オンライン検索が可能になっている。利用者用OPAC端末は全学で50台配置されているという。中国語、日本語資料については未入力でも現在もカード目録を維持しているとのことである。また、言語、資料の主題分野によってさまざまな分類表を使用している。英語、マレー語、アラビア語図書はLC分類、日本語、中国語図書はHarvard-Yenching分類、タミール語図書はBliss書誌分類、医学図書館ではNLM分類といろいろな分類表を採用している。

1976年に設けられた国民資料部(National Collection Division)では、マレーシアに関する資料(何語でもどんな形態でも)およびマレー語、インドネシア語で書かれた資料を網羅的に収集している。その他、非ローマ字資料である中国、日本、韓国語資料を扱う東アジア資料部(East Asian Collection Division)、タミール、サンスクリット語等を扱うインド資料部(Indian Studies Collection Division)も設けられており、それぞれ専任スタッフが配属されている。これら非ローマ字資料はアラビア語資料とともに別置されている。

今回私が訪問した図書館はいずれもその国を代表する大図書館ばかりであったが、各図書館とも電子機器の導入やコンピュータネットワークを活用して積極的な情報サービスを展開しており、活気に溢れた図書館活動をしていることを強く感じた。また、図書館に女性職員が多いことはどこの国でも共通しているが、シンガポール、マレーシアの図書館では図書館長をはじめ各部門の責任者の多くを女性が占めており、自信に満ちた活躍ぶりが印象的であった。

これらの図書館は、日本の図書館も含めてまだまだ発展途上の段階にあり、また、その発展段階は必ずしも一様ではないが、それぞれ与えられた条件の中で新しい技術を導入し、あるいは開発し、図書館サービスの向上に努めている姿が強く印象に残った。

最後になりましたが、今回の訪問を受け入れ親切に対応して下さいました図書館の皆さまに深く感謝申し上げます。また、この旅行にあたって学内の多くの方々にお世話になりました。心よりお礼を申し上げます。

カナダの図書館を訪問して

附属図書館情報サービス課資料サービス掛 佐藤依理子

平成5年の10月末から11月初にかけて、本学国際交流基金の事業の一環として、カナダの図書館を見学する機会に恵まれた。「カナダ」と言えば、カナディアン・ロッキーとスモークサーモン、といったくらいのイメージして持っていなかった私が、なんて無謀な、とわがことながら冷汗ものである。幸い、周囲の皆様方、また、旅程については訪問先の皆様方のご厚意により、つつがなく旅を終えることができた。なお、訪問先は

- ・Asian Library, University of British Columbia (バンクーバー)
- ・University of Toronto Library (トロント)
- ・Library of University of Prince Edward Island (シャーロックタウン)

の3館である。

以下は、その際のちょっとした印象記とでも言うべきものである。

アジア図書館 (ブリティッシュ・コロンビア大学)

University of British Columbia は、カナダ有数の総合大学である。構内にある人類学博物館は観光名所にもなっている。今回は、同大学にある施設、Asian Centre 内の Asian Library を訪問した。

この図書館は、建物自体がユニークな形をしている。一見すると、とても図書館には見えない (大阪万博の際、サンヨー館として使われた建物であるとのこと)。しかしフロアに一步足を踏みいれると図書やカードボックスがぎっしりならんでいる。

ここは、その名の通り、各種アジア系言語で書かれた資料を収集している図書館であり、その規模としてはカナダ最大のものであるという。私は主として日本語の資料を所蔵してある辺りを見せていただいたが、他にも中国語、韓国語、インド系言語……と各種アジア言語の資料が網羅されている。

この図書館でも機械化は着実にすすんでおり、1992年には目録業務が全面オンライン化されたとのこと。ひとつ、非常に印象的だったのは漢字を機械に入力するための、特殊なキーボードである。キーの上に漢字 (の部首) がずらりとならんだボードには、「漢字って、記号の組み合わせなんだ」と改めて気づかされた。

館内には、さすがにアジア系人種 (と、私には見受けられた。) の利用者が多い。聞けば、ここは市民にも公開されているそうであるし、階下には茶室等設備があるとのこと。さらに隣接して北大にも縁の深い、新渡戸稲造記念の日本庭園があったりもする。「アジアセンター」の名の通り、ここは一大文化施設として機能しているようであった。

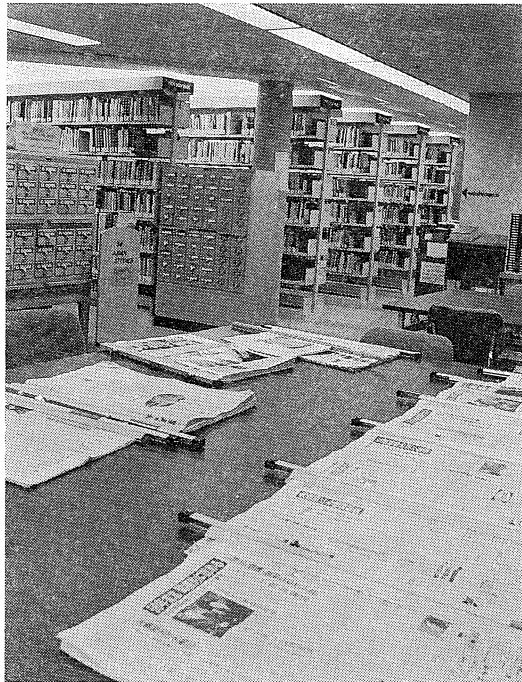
トロント大学図書館

トロントは言うまでもなくカナダ東部最大の都市であり、文化活動の面からみても中核をなしているように見受けられる。このトロントでも随一の大学であるトロント大学を訪問した。

構内は予想以上に大きく、目指す図書館にたどりつくまで何回も人に道を訪ねる始末。やっとたどりついた図書館がこれまた巨大で、その建物の大きさに文字どおり息を飲んだ。

この図書館は大きく三つのブロックに分かれている。中核をなすのが中央図書館の役割を担っている Roberts Library、貴重図書館である Thomas Fisher Rare Book Library、そして (ここに私は感動したのだが)、上記の二つの図書館に隣接して Library Science の学部の建物が設置されているのだ!

とにかくこの図書館ではその規模に圧倒され通しであった。今回訪問した中央図書館だけでも蔵書は 250 万冊余、全学ではなんと 700 万冊 (!) にもものぼるといふ。もちろんそののみ



ならず、ずらりとならんだ書架や目録のカードボックス、貸し出しカウンターに列を作る利用者、student staff を含めれば400人になるという職員の方々の数の多さ、すすんだ機械化、とりわけその廻り率の高さ等、なにかと刺激的であった。

プリンス・エドワード島大学図書館

Prince Edward Island は人口12万余の小さな島であり、なおかつ島それ自体でカナダの一州をなしている。ここでは、この島にある唯一の総合大学である University of Prince Edward Island の附属図書館を訪問した。

図書館自体は大学の歴史がまだ浅い(1969年創立)こともあり、小規模といえる。しかしこの図書館では図書館の利用者および職員にとってのアメニティについて学ぶべき点があったと思う。これは今回の訪問先の図書館全部について言えることでもあるが、「図書館」という場所が、たいへん心地よいのである。採光や空調など、施設の点からはもちろんである。さらに、喫煙室や談話室、休憩室等の充実や、付随して売店や食堂がある図書館など、興味が尽きないところである。ところで、北大の図書館は、利用者にとり、どのような場所なのであろうか。願わくば、「心地よい」場所であってけるとよいのだが。

以上、今回訪問した各大学図書館の印象を駆け足で述べて来た。上記のほかにも、おそろおそろといった感じでのぞいた各地の公共図書館、館員の方の対応が実に鮮やかで目を見張ったトロントの Boys & Girls House 等、印象に残る場所は多い。なにより、海外で働くたくさんの図書館員の方々にお会いできたことは、最大の収穫である。図書館員としての自覚と誇りを持って働いていらっしゃる姿には、たいへん啓蒙を受けた。簡単ながら、この場を借りてお礼を申し上げたい。

最後に、今回の渡航にあたり、様々な形でご尽力いただいた北海道大学の方々、とりわけ附属図書館の皆様にご心よりお礼を申し上げて、つたない報告の最後としたい。ほんとうにありがとうございました。

◆ 研修・講習会などから

「平成5年度第1回総合目録データベース実務研修」に参加して

附属図書館情報システム課目録情報掛 岸 本 一 志

本研修は、平成5年9月27日から10月22日までの4週間、学術情報センターで行われました。この研修は、センター接続館における目録業務担当者の指導的人材および地域目録講習会の講師を養成することを目的としております。

研修内容としては、第1週目はセンター教職員による講義および施設見学など、第2週目は目録情報基準のI・IIの講義要綱作成演習および実地見学など、第3週目は第4週目に行われるセンターの地域目録講習会の企画、準備、予行演習、第4週目が講習会講師および補助となっていました。

今までもそうだったのですが、今年度は特に“講師養成”に力を入れた内容になっており、前年度まで一番辛かったといわれている第1週目の課題レポートはなく、終始講習会の講義要

領作成や発表の回数が多い研修になりました。つまり、講義要領を作成し、皆の前で発表するということが今年度の研修で一番の重要課題でした。しかも、前年度まで研修に使われていた部屋は先生方の部屋になってしまったため、今年度の研修用の部屋はとても狭く、前年度まで16名だった研修生が今年度は12名に減り、ほとんどの人が発表できるようなカリキュラムになっていました。ちなみに今年度からおまけ付きで、首都圏にいて今年度からこの研修を受けた人はこの2、3年の間に必ず1回、センターの地域目録講習会で講師をやってもらおうそうです。私はこの話を聞いてちょっと残念でした。

研修中で一番心に残ったことは、第3週目の予行演習でした。私は、第4週目の実習、図書登録実習2(書誌階層のあるものの登録)の講師が当たっていたので、予行演習をしなければなりません。仕事でいつもしていることを話すのですが、たとえ理解していることでも、相手にわかりやすいように話をするということは大変難しいものでした。まして、予行演習の時、聴衆の中には研修生ばかりではなく、やさしい顔をしたセンターの人が何人もいます。さすがに私も予行演習の3日前から毎晩夜遅くまで何回も何回も練習しました。その甲斐があったのか大したことは言われずにすみましたが、中には厳しいことを言われていた人もいました。本番の実習の時は、予行練習をしていたせいもあり、あまり緊張することもなく無事終わることができました。ちなみに、講習会の受講生はほとんどが私立大学の方ばかりで、国立大学の方は一人もいませんでした。

終わってみると、東京に行くときの不安や緊張は全くどこかに消え、とても楽しく、一日一日がとても充実した短い1カ月間でした。そして、研修人数の少なかったせいか、それとも同じ修羅場をくぐったせいか、全国各地から集まった研修生とも仲良くなり、お話しをする機会ができました。何人かはもう何回も電話やFAXで書誌調整を行っております。ぜひ、この研修の体験を生かすために、日常業務はもちろん、来年度北大で行われる地域目録講習会には、先頭をきって教壇に立ちたいと思っています。

最後に、このような有意義な研修の機会を与えてくださった職場の上司、同僚の方々、また、研修中大変お世話になりました学術情報センターの皆様に紙上をお借りしてお礼申し上げます。

◆ お知らせ

○ 最近の電子ボードから一蔵書検索システムに関する利用者からの要望・質問とその回答一

すでに利用されている方もいらっしゃると思いますが、附属図書館ではHINESに図書館一般に関する情報を交換するオープンフォーラム f. librarian を開設しており、自分の名前をグループに登録すればどなたでも書き込みができます。f. librarian では、図書館員による図書館関係の論文の紹介などのほか、図書館サービスに関する利用者からの質問・意見などが掲載されたりします。その中からいくつかを整理してご紹介したいと思います。

① 検索語入力にローマ字変換を使いたい。

(利用者) 数年前になりますが、一度教養分館で(蔵書検索システムを)使わせて頂きました。正直に言って、ふだん英文のキーでタイプをしている自分には、1文字1文字キーを探しながらの検索で、1度で懲りて、以来、遠ざかってしまいました。ローマ字入力、あるいはローマ字漢字変換などが検索時に選択できると便利だと思うのですが。

(図書館員 A) 検索語を入力するときローマ字かな変換を使えるようにという声はかなりあります。次の図書館システム(平成7年4月導入予定)では、ローマ字による「かな漢字変換」を使っての検索語入力ができるようになると思います(漢字による検索も可能になりそうです)。ただし、入力モードを変えるための操作が一つ加わることになります。

② 所在箇所(研究室名など)で検索したい。

(利用者) 検索項目で、所在箇所を検索キーにできると良いのですが、できれば前方一致検索が可能なかたちで。

(図書館員 B) ご要望の意図は、検索結果の集合を「自分の学部の分」等にしぼりたい時に必要ということかと思います。たしかにこの「限定機能」は必要だと思いますので、次期システムでは実現したいと思います。なお、現在(これから)も所在箇所を利用者用蔵書検索の1次キーとして提供していない理由は、OPAC(Online Public Access Catalog)では、「この本がどこに(研究室名を含む)に在るか」という情報の提供は必要ですが、「...研究室にどんな本が在るか」という検索機能は提供しない方が良く考えたためだと思います。

(利用者) 「...研究室にどんな本が在るか」という検索機能は提供しない方が良く考えた理由の想像はつくのですが、あまり納得できません。ここは国立大学、税金で運営しているところなので、情報はできるだけ公開すべきだと思うのですが。

(図書館員 C) 国立大学として購入した資料の情報を公開すべきであることは当然のことで、北大にどんな資料があるか、またその資料がどこにあるかということは、現在のシステムで検索できるようになっています。ただ、「ある研究室が(ある研究者が)どのような資料を選定・収集しているか」という情報は、「ある人がどんな本を読んでいるか」という情報と同じく一種プライベートな側面ももっており、図書館として利用者に公開すべきではないと思います。

③ 雑誌にも分類記号をつけて欲しい。

(利用者) 雑誌には分類記号の設定はできませんか。

(図書館員 D) 現在図書館で書籍に分類番号を付けている第一の意義は、「書籍を書架に一元的に並べる」ためです。種類が非常に多く、一冊一冊が独自の価値を持つものであるというのが書籍の資料としての特徴ですから、大量の図書を整理し、利用するための一つの方法として、書籍のおおよその「主題」を記号化し、その記号で一元的に書架にならべています。

一方、雑誌の種類は書籍に比較すると多くない(北大では書籍は数百万単位、雑誌のタイトル数は数万単位)ため、タイトルのアルファベット順なりでの整理・利用が可能な範囲にあります。また雑誌の場合、独特の価値を持つのは、雑誌に収録されている「論文」の単位であることが普通なので、タイトルごとに「主題」を記号化することは難しく、あまり意味を持たないのではないかと思います。

○ コンピューター・ウイルスと著作権について

HINES 利用委員会が発行している「HINES World」No. 23 に標記のことについて注意を促す記事が掲載されました。

図書館、図書室等にもパソコンが普及し我々にもコンピューターが身近なものになって来ました。また、HINES の本格稼働以来コンピューターネットワークを利用する機会が増えてきました。今後とも充分留意すべきこととして、HINES 利用委員会の承諾を得て全文を転載させていただきました。

コンピューター・ウイルスと著作権に関するご注意とお願い

HINES 利用専門委員会

1. はじめに

HINES の利用は、1990年4月に第1年次システムの運用を開始して以来、3年半を経過しました。今では、接続端末数2,625台、利用登録者1,942名にも上り、北海道大学の基盤設備として大きな役割を果たしてきています。また、HINES は、学術情報ネットワークと接続され、全国の大学や外国の大学等とも毎日情報の交換がなされています。

このようにネットワークが大きくなると、コンピューター・ウイルス (以下、ウイルスという。) やコンピューター・プログラム著作権 (以下、著作権という。) に注意を払わなければならなくなります。ウイルスと著作権、ともにプログラムの不注意なコピーが問題を起こします。

HINES 利用専門委員会では、健全なネットワークの利用を維持するために、ウイルスと著作権について一文を載せ、あらためて注意を喚起することにしました。

2. コンピューター・ウイルス

日本におけるウイルスの被害状況は、情報処理振興事業協会 (略称 IPA) が毎月全国から寄せられる被害届を公表しています。IPA は、1990年4月からウイルス被害の調査を行ってきましたが、最近被害が急増しているところから利用者への注意を呼びかけています。

IPA への8月の届出件数は、表にみるように調査開始以来初めて100件を超え120件となりました。特に、5月からは毎月記録を更新しており、今年の半年間で既に昨年の年間件数253件を超え269件に達しています。しかし、IPAの届出件数は、報告すると会社の不名誉になるからと届出なかったり、届出ることすら知らない利用者があるなど、実際の被害はこの10倍以上にもなっているといわれています。

届出内容をみると、ウイルスはフロッピーディスクを通じて感染するケースが大半を占めていますが、最近ではパソコン通信やLANを経由した感染も報告されているとの事です。

表 ウイルス被害の IPA 届出件数

年	月	届出件数	年	月	届出件数
1991年		57件	1993年4月		32件
1992年		253	5月		49
1993年1月		23	6月		83
2月		43	7月		97
3月		39	8月		120

ウイルスは、1970年代にアメリカで発見され、パソコンの普及とともに急激に蔓延しました。日本には、1980年代にウイルスに汚染されたフロッピーディスクをアメリカから持ち込んだのが始まりといわれていますが、最近では日本生まれのウイルスも何種か発見されています。

ウイルスは、特定の日時になると音楽を奏でるだけの「良性ウイルス」からディスクやメモリーを破壊する「悪性ウイルス」まで、世界で1,700種(1993年3月25日、4月23日、日本経済新聞)ともいわれています。日本では、これまで60種ほどが発見されています。特に、ハードディスクが汚染されると、ディスクの内容を全部捨て最初からインストール仕直さなければならず大きな被害を受けます。

日本では、後に述べる著作権保護の意識の低さもあり、フロッピーディスクを用いてソフトを勝手にコピーする利用者が多く、ウイルスの被害は拡大する一方ですが、IPAでは出処不明のソフトを使わないように呼びかけています。

ウイルスを検出しシステムの破壊を未然に防ぐには、通常の病気と同じようにワクチンと呼ばれるチェックプログラムもありますが、不用意なソフトのコピーやファイルのダウンロードを行わないようにする必要があります。また、不幸にして自分のシステムへの感染を発見したなら、すぐにネットワーク接続用のコードを外し、他のシステムへの感染経路を切り離す必要があります。そして、ただちに大型計算機センターへ連絡されるようお願いします。

3. コンピュータ・プログラム著作権

著作権については、HINES world No. 12 (1991年10月発行)に西井豊氏による「無料ソフトアラカルト」が掲載されていますが、最近HINES上で意見交換されている事もあり再度整理してみます。

今日流通しているソフトウェアには、商品として通常の流通経路を通して市販されているもののほかに、PDS (パブリック・ドメイン・ソフトウェア)、フリーウェア、シェアウェアなどがあります。このうちPDSは元来著作権が放棄されており、どのような形でも自由に使えるもののことを言いますが、日本では著作権法および著作隣接権法の規定により著作権は発表と同時に発生し、著者自身でも放棄できないことになっているそうです。このため日本には厳密な意味でのPDSは無いこととなります。要するに基本的には、コンピュータ・プログラムには著作権が設定されているというのが日本の状況です。もちろん、市販のソフトをコピーして使用する事は自己のバックアップ以外には認められていません。またシェアウェアは、試用はともかく実際に使おうという場合は作成者に連絡を取り、決められた料金を支払う事になっておりルールは明確です。

これに対して、フリーウェアは著作権が保持されてはいるものの、使用は自由(無料)であるソフトウェアを言います。これらの中のどれに属するかに拘わらず、著作者の著作権に対する考えを十分に尊重して利用することが、利用者のモラルとして求められている訳です。当委員会としては、この種のソフトは著作者が転載可とコメントしているならば、利用させてもらうのは差し支えないと考えます。勿論、このようなソフトを自分のモノと称して、他に譲渡したり改造して発表することは許されないことです。

いずれにしても著作権問題は、最終的には個々人の良識に負うところであり、HINESの利用に当たって充分注意を払う必要があると思われます。著作権の適切な保護が近年ますます重要になってきた事から、このたび文化庁も各大学に通知文書を出しコンピュータ・プログラムの適正な管理をお願いしているところです。(参考資料参照)

4. おわりに

ネットワークの最大のメリットは、多くの人達と何時でも自由に情報交換ができることにあります。しかし、利用者のひとりひとりがこのネットワークの健全な発展のために努力して下さる事が必要だと思います。

最後にカラー複写機の利用についてですが、昨年来カラー複写機による偽造1万円札の事件が発生し大々的に報道された事は記憶に新しいところです。紙幣はコピーすること自体が法律で禁止されていますのでこれについても十分な注意をお願いします。

[参考資料]

平成5年9月7日
文化庁次長

大学等におけるコンピュータ・プログラムに係る著作権保護について (通知)

1. コンピュータ・プログラムの著作物 (以下「プログラム」という。) の開発、流通、利用に際し、他人の作成したプログラムの複製、翻案等の利用をする場合には、原則として、著作権者の許諾を得る必要がある (著作権法第63条)。
2. プログラム複製物の所有者は、当該プログラムの滅失毀損に備えてバックアップコピーを作成すること、特定のコンピュータで利用し得るようにするためプログラムを修正することなど、自ら当該プログラムをコンピュータで利用するため必要と認められる限度において、著作権者の許諾を得ることなく、当該プログラムの複製または翻案をすることができる (著作権法第47条の2第1項)。
しかし、プログラムを複数のフロッピーディスク等へ複製すること (ネットワーク (LAN (Local Area Network)) で転送して複製する場合も含む。以下同じ。) は、この規定により許容されるものではなく、著作権者の許諾を得る必要がある。
3. 公表された著作物の引用は一定の条件の下に許容されているが、他人の作成したプログラムの一部を自己の作成するプログラムに複製することは、引用とは解されず、著作権者の許諾を得る必要がある (著作権法第32条第1項)。
4. 学校その他の教育機関における著作物の複製は一定の条件の下に許容されているが、著作物の種類および用途並びにその複製の部数及び態様に照らし著作権者の利益を不当に害することとなる場合はこの限りでないとしており、複数台のコンピュータにおいて利用するために、プログラムを複数のフロッピーディスク等へ複製することは、著作権者の利益を不当に害するものと解されるため、著作権者の許諾を得る必要がある (著作権法第35条)。
5. 他人が違法に複製したプログラムであると知りつつ、その複製物を大学等において使用する行為は、プログラムの著作権を侵害する行為とみなされる (著作権法第113条第2項)。

◆ ニュース

○ 駐日 EC 委員会代表部広報部長ルグリ氏が来訪されました。

去る2月7日(月)、駐日 EC 委員会代表部参事官広報部長ジェラルド・ルグリ氏が来訪されました。同氏は昨年5月に着任され、このたび、札幌市長の招きで来札されたのを機会に、北大 EC 資料センター(以下、EDC: European Documentation Center)の視察及びヨーロッパ関係研究者との懇談を希望されていたものです。

EDC 視察は、参考閲覧室において北大での沿革、利用状況、資料の整理等について質疑応答を交えながら行われ、貴重なアドバイスをいただくことができました。

ひきつづいて、研修室において石坂昭雄経済学部教授の司会で行われた EC 資料関係懇談会には、学内関係教官8名、大学院生2名、附属図書館3名の参加があり、始めに、ルグリ氏から EC・EU の現状と今後の政策、展望について講演があった後、通貨同盟及び通貨統合時限の可能性、EU 加盟国間の意志決定問題等について、また、EDC 関係では、東京広報部情報サービス室利用上の諸問題および1970年以前の所蔵資料の充実希望について、また、国内 EC 資料情報ネットワークの拠点となる EDC の育成問題についてなど熱心な意見交換が行われました。



本学の EDC は、1982年に設置認可を受け、国連寄託図書館、OECD 寄託図書館、カナダ政府資料寄託図書館と共に当館の貴重な国際機関刊行資料コレクションの一つとして、その充実に努めて来ておりますが、今回のルグリ氏の来訪は、最近の EC 状況に対する知識を深め、今後の北大 EDC の効果的運営を図る上で、貴重な意見交換の機会であったと思われます。

最後に、ご多忙の中、司会をお引き受けいただいた石坂教授はじめ、参加いただいた研究者の方々に厚くお礼申し上げますと共に、今後とも、北大 EDC に対し忌憚のないご意見をお願いする次第です。

(情報サービス課参考調査掛)

◆ 特別寄稿

水産学部図書館のあゆみ

水産学部図書掛 金子美弥子

はじめに

昭和10年の函館高等水産学校の設立以来、60年の歴史を持つ本図書館は戦後、新制大学の学部への昇格、大学院の設置、農学部水産学科の移行、学科の増設、新館の竣工などの変遷の中で整備拡充され、徐々に学部図書館としての機能を充実させて来た。

明治20年創立の札幌農学校水産学科の蔵書を受け継ぎ、購入による資料収集に加えて、水産学の独自性から、広く海外63カ国の364に及ぶ研究機関との、学術交流による文献の収集にも力を注いで来た。

7,173冊からスタートした蔵書は、1993年には125,920冊となり、和洋合わせて3,500種余の雑誌も含めて、水産学の分野では豊富で価値ある蔵書を構成している。英国のChallenger号による海洋探検調査報告を筆頭に、13種のExpedition類や、藤田経信、大島正満先生など水産学創世期の人々の個人文庫、戦前の北洋漁業や千島関係の資料もあり、蔵書の特徴づけている。札幌キャンパスより遠隔地にある故、独立館的な要素も持ちながら今日に至っている。

1993年の統計で利用対象は、学生(院生も含む)677人、教職員221人である。96の座席を持つ明るく静かな開架閲覧室は、年間の入館者数は50,895人で1日平均では205人となり、10年前の2.6倍。学生1人当たりの年間利用冊数の18.3冊は、10年前の2倍で、図書館の利用は年々増加している。ちなみに「日本の図書館」1991年版のデータによると、国立大学の学生1人当たりの貸出冊数は8.9冊で、年々停滞気味であるという。私は、42年間この職場で働き続けてきた。昭和47年に新館が出来てからは、閲覧、参考の仕事をしている。定年を目前にして、これまでの歴史を振り返りながら、ここに水産学部の図書館を紹介したいと思う。

沿革

設立以来60年の歴史を振り返ってみる時、おおよそ3期に区分出来るを考える。

第1期は、創立以来昭和24年までの、高等水産学校、水産専門学校の時代である。昭和4年、帝国議会が高等水産学校の設置を函館に定め、北海道帝国大学附属水産専門部を函館に独立移転させて、函館高等水産学校が創立された。財政的な理由などから、開校したのは昭和10年4月1日であった。校庭の一角に、面積460m²の図書館が設立され、鉄筋コンクリートの書庫(204m²)および木造の事務室、教官閲覧室兼資料室があり、北海道帝国大学附属図書館より和書2,745冊、洋書4,428冊が保管転換されてスタートした。資料は、日本十進分類法に基づいてきちんと整理されており、先達の仕事ぶりに敬意を表している。

昭和16年に太平洋戦争が始まった。検閲制度や用紙不足などで出版物も制限されるなど、物心ともに大変な時代であったことは、図書の受け入れ冊数の上からも推察される。昭和20年までの4年間の受け入れ状況は、和書が1,553冊、洋書が156冊となっている。

昭和21年に至っては、和書が0、洋書が77冊寄贈されただけである。昭和19年には文部省直轄諸学校官制改正により、函館水産専門学校と改正され終戦を迎えた。

終戦の2ヵ月後の10月には、アメリカ軍によって校舎が接収され、やむなく函館市立東川小学校の仮校舎へと60時間以内に急ぎょ移転させられた。この時、軍国主義的な沢山の資料

を箱に詰めて、書庫の屋根裏へ隠したりもした。この慌ただしさの中で紛失した図書もある。仮校舎での不便な生活は1年2カ月続いた。窓に鉄柵のあったコンクリート造りの書庫が、アメリカ兵の監獄として使用されていたという逸話は、戦争がもたらした爪痕のひとつと言えるだろう。戦前、戦後の混乱期は、資料を保管して置くのがやっとという時代だった。

設立当時の図書館主任、故坂本武雄氏は、在職中の15年間に、明治初年から昭和20年まで78年間の水産関係の和雑誌300余種を対象に、研究調査論文、総説などを採録し、それらを日本十進分類法の660水産学の中で細分類し、故谷川英一教授の監修のもとに、全10巻、2,400ページにのぼる〔日本水産文献集成〕を刊行した。謄写印刷だったこの出版物の刊行に関しては、谷川研究室の学生や図書館職員の並々ならぬ協力があったことが実現されたことも付言したい。これは、日本における最初の水産学の文献集として、高い評価を受けた労作であった。

第2期は、国立学校設置法が昭和24年5月に公布され、函館水産専門学校は、新制北海道大学水産学部に包括されて以来、昭和47年に新館が竣工されるまでの期間である。水産増殖学科(40名)、水産製造学科(80名)、漁業学科(40名)、遠洋漁業学科(40名)の4学科が設置された。また、昭和28年には大学院および特設専攻科が設置された。他方、昭和15年に農学部を設置されてあった水産学科4講座も移転し、蔵書3,700冊が管理換えになった。大学設置基準に見合った整備拡充が必要になり、この時北海道庁は、500万円づつの補助金を3年間援助してくれた。当時の水産学部の図書館の年間予算が100万円であったことから考えても、仕事量の増加は想像を絶するものであった。当時定員は4名で、定員外職員が1名増やされただけだったので、購入した図書や雑誌は、目録カードを1枚作っただけでラベルを貼り、支払するだけで精いっぱいだった。カードの複製や目録カードの排列などは後回しになり、これらの仕事を締めくくるのには、その後10年余の歳月を要した。道庁援助費のお陰で、貴重な雑誌のバックナンバーや洋書、海洋探検調査報告類など、有用な資料を纏めて収集することが出来た。

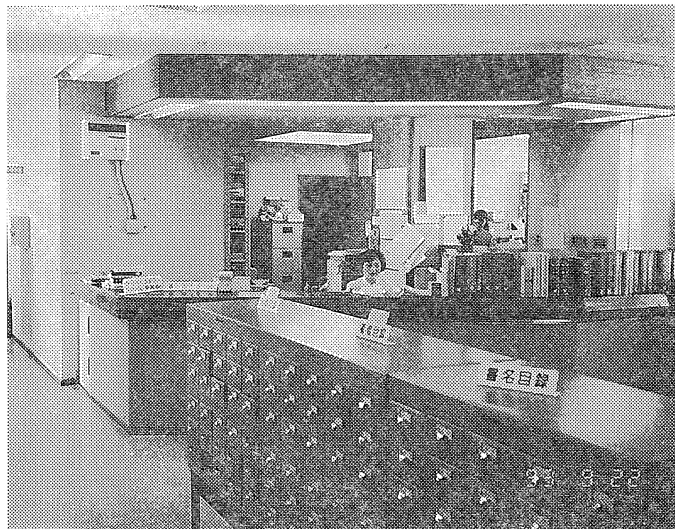
一方、農学部水産学科の移行により管理換えされた蔵書の中には、藤田経信文庫(魚類寄生虫や水産養殖関係の論文別刷集)や、大島正満文庫(日本近海およびアジアの魚類の分類関係の論文別刷集)などや、Expedition類が含まれていて、水産学部の蔵書を特色あるものになっている。

資料の急増で書庫の増設が必要となり、2年に亘って、函館市より500万円の寄付を受けて、昭和32年には200m²の書庫が増設された。書庫は、新旧合わせて404m²となった。この時、雑誌と単行本を別置したので、白衣を埃まみれにしながら本の移動に明け暮れた。

大学の民主化を叫んだ昭和40年代の紛争の嵐は、水産学部にも起き、昭和45年には、机と椅子のバリケードで図書館が封鎖される一幕もあったけれど、書庫その他は無事だった。その頃キャンパスでは校舎の建て替えが進行していた。昭和47年竣工予定の新館移転に向けて下準備が始まった。昭和45年に日本十進分類法第7版への切り換えを行った結果、目録カードの組み替えが必要となった。この仕事は、分類の専門的知識を必要とする根気のいる仕事で、私は日常業務と平行してこの仕事に取り組んだ。カードは事務用、閲覧用合わせて約9万枚あり、神経を集中しながら同じ姿勢で指先を頻りに動かす作業だった為に、頸肩腕症候群を患い辛い毎日を送った。また、雑誌の和洋別置の作業もあり、みんなでスケジュールを組んで作業をした。以上述べて来たように、この期間は、大学の学部としての整備拡充に費やされ、辛酸を嘗めた時期であったと言える。

第3期は、昭和47年秋、新館へ移転してからの歴史である。2階建ての新しい図書館は、

以前の2倍の面積(1,360 m²)を持つ明るく綺麗な建物で、1層には、事務室、資料室、会議室その他があり、2層目は全部閲覧部門に当てられた。96の座席を持つ366 m²の開架閲覧室には広いカウンターがあって、専任の係員が配置されるようになった。旧図書館の閲覧室は、65の座席のある180 m²の半接架方式の閲覧室で、隣接する事務室の端に開いた窓口が出納台で、事務仕事の合間に雑誌や図



書の出納をするといった具合だったので、全くの様変わりだった。新しいカウンターで仕事をするように命じられ、以来私は、定員外職員1名と共に閲覧、参考の仕事をしてきた。カウンターに座り一日中利用者のニーズに直接触れるようになって痛感した事は、以前の目録や分類の仕事は、多忙なために、著者や書名、巻号などを追いがちで、内容にまで立ち入る暇が持たないままに過ぎていたという事であった。立派なカウンターがあっても、並ぶべきツールがほとんどなく、正にゼロからの出発であった。文献の所在調査にはどうにか対応出来ても、「プランクトンの培養液に関する資料は？」などの事項調査は、最初の内は何処から手を付けていいのやら、右往左往する毎日であったのである。20年余の日々を振り返る時、参考業務は、利用者のニーズが仕事を広め、深めて呉れたと言える。この様な経緯から、第3期は、利用面に重点を置いて述べてみたい。

閲覧および貸出しサービスについて

利用対象は、学部学生、院生、教職員、研究生が中心であるが、卒業生や国の水産研究所や都道府県の水産試験場をはじめ地もとの漁業関係者などの利用もあり、市立図書館からの紹介で訪れる市民もある。前述のように、1993年の統計を10年前と比較してみると、入館者で2.6倍、貸出冊数では2倍、学生1人当たりの年間利用冊数も2倍と言う具合に、年々利用が増加していることは喜ばしい。なお、館内閲覧や書庫内での雑誌の利用はチェックしていないので、実質的には利用数は更に増加する。昭和58年以降、2年目学生の移行時に学科担任と連絡を取り、講義の時間を30分くらい頂いて、学科ごとに図書館で利用ガイダンスを行ってきた。また4月には、各講座ごとに4年目学生に対して、二次資料や文献の所在目録、索引誌の調べ方などについて具体的なガイダンスを行なってきた。利用の増加に、その効果が現れていると思う。開架図書は10,700冊(専門図書9,000冊、参考図書1,700冊)と極めて少ない。しかもこの10年近く、学生用専門図書の購入予算は年間約100万円で凍結状態にある。学生専門図書の選定は、各学科の教官が行っているが、出されたリストをもとに、重複や複本、シリーズものの継続状況のチェックなど、利用度や蔵書構成などを加味しながら調整する。参考図書費は、年間85万円程である。参考図書の選書には、日本図書館協会発行の「日本の参考図書四季版」や各社の出版ニュース、雑誌に載る図書案内などに目を通しておく事も仕事のひとつ

である。図書の不足を補う意味で、私は雑誌の中から総論を選んで記事カードを作り始めた。それ以来、その時々新しいニーズを捕らえては、水質汚濁や赤潮、各魚種ごとの生態や生活史、魚病、魚のストレス、リモートセンシング、各県別漁具、漁法など、主題別論文の記事カードが20年間に12,000枚以上になり、日本十進分類法の分類別に排列してカード目録を作っている。これは、レファレンスサービスや学生のレポート作成時の文献探しに役だっている。また、主要和雑誌や水産研究所、水産試験場、大学の水産関係の学部などの報告176誌の目次をコピーして総目次集を作り、参考図書コーナーの一角に置いて役立っている。学生用購入和雑誌40誌と寄贈和雑誌270誌を開架閲覧室に排架し、閲覧に供している。

1986年より蔵書検索システムが開始された。以前は、いちいち本館の参考掛に電話して所在を調べてもらっていた時と比べると、全学の所蔵が居ながらにして判るということは素晴らしいことである。2年目のガイダンスの時に尋ねてみると、CLARKの端末システムを利用したことがない学生が多く、個々に利用指導する場合も多い。端末機は、閲覧室に1台と事務用としてカウンター内に1台ある。一方、学術情報センターの目録検索システムNAP1の利用は、図書館職員が検索を代行しているが、学外の資料の所在調査におおいに役だっている。留学生の数も年々増加し、現在は24名になっている。「ムセキツイドウブツのホネの図鑑がありますか?」と聞かれ、良く尋ねてみると或る種のミジンコの検索図を求めている事が判ったという例に見られるように、利用に関しては言葉の問題その他気苦労もある。

文献交換業務と資料情報サービス

学部の出版物は、水産学部研究彙報(1950年発刊)、水産学部紀要(1953年発刊)および海洋調査漁業試験要報(1957年発刊)があり、これらを交換文献として学術交流を計ってきた。文献交換業務は、住所変更や機関の統廃合、送付先リストの更新期の返信、加えて欠号請求もまめに行わなければならない、なかなか大変な業務である。現在、世界63カ国、364機関および国内331機関から、年間1,500余種の寄贈雑誌を受け入れている。この内、国内の大学の中で、当学部だけが持っている雑誌は、100種ほどある。楡蔭No.84の平成3年度年間受入:雑誌種類数の寄贈洋雑誌数は、附属図書館508の次ぎに多いのが、水産学部の459である。寄贈交換の雑誌は、1970年頃までは学科に回覧していたが、回覧途中の散逸や人手不足などにより中止してしまった。1980年になって、和洋の交換寄贈雑誌の受け入れを二階カウンターで取り扱うことになった。学術的に貴重なものも多く、主要なものは目次に目を通し、希望する教官や院生には資料情報サービスを行って喜ばれている。

レファレンスサービスおよび情報検索

引用文献の所在調査やテーマ別文献の収集などでカウンターを訪れる利用者は、年間3,500を超えている。他大学の図書館や民間の研究機関から電話や文書による質問、時には、外国から手紙による相談も舞い込む。これらに対応するためには、日常不断に関連分野のBibliographyの収集や参考図書の内容のチェック、雑誌の目次の通覧、各講座の研究テーマの把握や他の機関の研究内容にも気を配る必要がある。先に述べた雑誌記事カード目録は、レファレンスの貴重なツールでもある。

研究と教育の二つの側面を持っている学部の図書館は、学内の研究業績をきちんと整理して、必要な時にすぐに利用に供せるようにして置くことも、図書館としての大切な仕事であると考えてきた。博士論文、修士論文の著者名別、年度別、講座別目録カードや、博士論文審査の要旨をコピーして著者のABC順にファイルしたもの、水産学部研究彙報や日本水産学会誌の学内関係者の氏名のABC順の記事索引も作成してきた。個人文庫には、藤田文庫や大島文

庫の他に、佐々木望、野沢俊次郎、村山佐太郎、渡辺宗重、時田郁、小林新二郎、岡田雋、元田茂、谷川英一、近江彦栄、小林喜雄、上野達治諸先生の文庫もあり、大部分は別刷集である。このうち元田文庫は、講座にあった目次のフロッピーをもとに、前掛長の諏訪田義美氏がシステム化し、著者とキーワードから検索出来るようになり、たいへん便利である。

アメリカの Wood Hole や Scripps の海洋研究所をはじめ世界各国の研究機関から Collected Reprints や Contribution, Reprints などという形で、業績集を受け入れている。利用者が必要とする文献が、雑誌のタイトルでは学部に無くても、論文の著者の所属を調べて業績集の中から探し出せる物も多い。しかし、媒介となる職員が居なくては、これらは、書架に埋もれてしまう宝である。元田文庫のように、これら全部の業績集がシステム化されるならば、ペーパーの裏付けのある世界にも誇れる水産学の一大データベースになるに違いない。しかし今の所は残念ながら夢でしかない。

Dialog や JOIS の民間情報検索システムが昭和 58 年より導入された。インフォメーションサービスが効を奏してかキーワードの理解や検索式の組み方など、検索にはあまり苦勞せずすんだ。利用者と一緒にマニュアルで検索方法を検討してから、職員が検索を代行している。校費使用に限られている上、料金も高く、利用度のある 2 月から 4 月は、支払年度との関係で利用出来ないことなども加わって十分に活用されてはいない。今年度から BIOSIS や MEDLINE の CD-ROM や CCoD マルチ検索システムも利用出来るようになった。CCoD は簡単な利用の手引きを作り、関係する講座の院生や教官に呼びかけてデモンストレーションも行った。1 人 1 時間の利用制限で始めた。日を追うに従って利用者が増えている。無料で利用出来る点がとても喜ばれている。

文献複写サービス

ILL システムの導入で平成 4 年度は、受付 573 件、依頼 506 件で平成 2 年度に比べると各々 2 倍に増加してきている。複写機が 1 台より多く、日中は書庫内の雑誌を複写する利用者が多いので、5 時過ぎに依頼の分の複写をする場合が多く、職員の勤務時間や健康管理の上からも問題がある。

おわりに

シジュウカラガンについて調べているという或る大学の教官が書庫の中で、Leonhard Stejneger の Results of Ornithological Explorations in the Commander Island and in Kamtschatka. Washington, Government Printing Office. 1885 を見つけて「この本は、東京中どこを探しても見あたらなかった本です。ここに立ち寄って良かった。」と喜んで帰られた事がある。書庫の中には、魚類学の世界的な古典である Cuvier, M. le B. と Valenciennes, M. の Histoire Naturelle de Poissons Tome I-XXII. 1828-1849. Paris, Chez P. Bertrand や木版印刷、折本仕立ての小山田与清跋文「勇魚取(イサナトリ)絵詞」など、歴史的に価値のある資料がまだまだ埋もれている。これらの一つ一つ解題し利用者にも知らせる仕事は、ほとんど手付かずじまいになってしまった事は心残りである。

司書講習が仕事の未来を開き、「ああ、在りましたか！」と喜ぶ利用者の笑顔が嬉しくて、私は仕事に駆り立てられ、あれこれの創意工夫をこらして道を拓いて来た。昨秋、学部を訪れたかつての卒業生の I 氏(現在はある大学の教官)が閲覧室のあちこちをカメラに納めて帰り、後日その写真と一緒に手紙を頂いた。その手紙の一節に「私、未だに金子さん程の素晴らしい司書にお目にかかったことはございません。院生一人一人までの専攻分野を把握し、有益かつ新しい情報、アドバイスを与えて下さった事など……感謝致しております。」と身に余る言葉

があった。今、私はその言葉を胸に、職場を去る。

◆ 本学教官著作物 (本館・分館受贈分)

本学教官の方々から附属図書館に下記の著作図書を御寄贈いただきました。

[本 館]

○名誉教授

中川 秀 恭 なぜキリスト教か：中川秀恭先生八十五歳記念論文集 創文社 1993

今村 成 和 私的独占禁止法の研究(六) 有斐閣 1993

〃 独占禁止法入門 第4版 (有斐閣双書) 有斐閣 1993

〃 人権論考 有斐閣 1994

大野 公 男 Quantum Chemistry Literature Data Base (Physical Sciences Data, 12) Elsevier 1982

松沢 弘 陽 近代日本の形成と西洋経験 岩波書店 1993

○経済学部

宮本 謙 介 インドネシア経済史研究：植民地社会の成立と構造 ミネルヴァ書房 1993

佐藤 茂 行 イデオロギーと神話 木鐸社 1993

○医学部

宮崎 保 (共編) The Mechanism and New Approach on Drug Resistance of Cancer Cells. Excerpta Medica 1993

○工学部

新保 勝 (分担執筆) ファジィ・データベースと情報検索 (講座ファジィ 9) 日刊工業新聞社 1993

○言語文学部

中村 健之介 知られざるドストエフスキー 岩波書店 1993

〃 (編訳) ドストエフスキー裁判 北海道大学図書刊行会 1993

○大学院地球環境科学研究科

山村 悦 夫 Introduction to Model Reference Adaptive Theory (Institute of Environmental Creation, International Series, Vol. 1) Institute of Environmental Creation 1993

○医療技術短期大学部

鈴木 重統 (共編) Perinatal Thrombosis and Hemostasis. Springer-Verlag 1991

〃 周産期出血の診療 改訂第2版 金原出版 1991

[教養分館]

○名誉教授

大野 公 男 Quantum Chemistry Literature Data Base (Physical Sciences Data, 12) Elsevier 1982

○工学部

荒谷 登 (共著) 建築家のための熱環境解析入門 北海道大学図書刊行会 1993

附属図書館では、本学教官著作物をできる限り収集するようつとめております。今後とも、よろしくご協力下さい。

◆ 会 議

第 26 回国立七大学附属図書館部課長会議 <平成 5 年 11 月 25 日 (木)>

場所: 九州大学

協 議 事 項

1. 図書館サービスの展開とキャンパスオートメーションの推進について
2. (ア) 外国雑誌購入契約にかかる諸問題について
(イ) 外国雑誌の購入方法について
3. 次期事務電算化システムのモジュール開発と要員の養成について
4. 部局図書室制度と中央図書館との相互の連携について
5. 自己点検・自己評価実施上の問題点について

第 67 次国立七大学附属図書館協議会 <平成 5 年 11 月 26 日 (金)>

場所: 九州大学

協 議 事 項

1. 学内情報流通体制の整備について
2. 古文献担当職員の確保・養成について
3. 新しい図書館情報サービスのための「新情報基幹整備」について
4. 図書館業務における大学院生の活用について
5. 学術論文デリバリーサービスと図書館システムのあり方について
6. 学術雑誌目次速報データベース事業計画の進捗状況と今後の対応について

第 113 回教養分館委員会 <平成 5 年 11 月 26 日 (金)>

議 題

1. 教官選定図書について
2. 書庫拡充計画について

第 153 回図書館委員会 <平成 6 年 1 月 10 日 (月)>

議 題

1. 附属図書館備え付け資料の購入計画について

報 告 事 項

1. 平成 5 年度二次補正案に係る電動式集密書架の導入について
2. 教養分館のブックディテクション導入について
3. そ の 他

北海道大学附属図書館報「楡蔭」(ゆいん) 通号 89 号
平成 6 年 (1994 年) 3 月 31 日 発行 発行人 附属図書館事務部長 金 井 孝
編集事務 山本幾夫・阿部勝義・岡田 潔・菅原英一・佐藤清一・午来信子・
岸本一志・佐藤依理子・松尾博朋・伊藤啓子・土田京子・柴森義晴
発行所 北海道大学附属図書館 札幌市北区北 8 条西 5 丁目 706-2967
印刷所 文栄堂印刷所 札幌市中央区北 2 条東 12 丁目 231-5560・5561